

日本軍「慰安婦」問題が示唆する恒久平和の構築

2013.09.14

文責：株式会社エナテクス 磯江公博

はじめに

本年（2013年）6月26日に、「竹島の日」を採択した島根県議会が『日本軍「慰安婦」問題への誠実な対応を求める請願』を採択した。内容は日本政府が「慰安婦」問題に誠実に対応することが、国際社会に対するわが国の責任であるとして 1. 日本政府が「河野談話」を踏まえて誠実に実行すること。2. 被害女性の名誉と尊厳を守るべく真摯な対応を行なうこと。として、内閣総理大臣に意見書を提出した。

戦後生まれの私にとって、日韓両国に存在する「慰安婦問題」「強制動員問題」「竹島問題」「朝鮮半島の非核化」等々の課題は遠い存在であった。8月23日から25日の3日間、日本軍「慰安婦」問題の被害者 李ヨンスさんと韓国弁護士団6名の方々と鳥取、島根県でのシンポジウムに同行させていただくことを契機として、多くのことを学び、経験することとなった。

同時に1994年に設立されたHNS（人間自然科学研究所とは生命の本質、人間の特性から理論的に考察、現実を見据え、持続的に楽しく生きられる地球社会を目指し、実践するシンク＆ドゥ・タンク）の理事長小松昭夫氏は、今日までの様々な活動を通じて「和の文化」を生み出すHNSプロジェクト構想を発表し、この度、設立以来の活動が評価され、ビルゲイツと共にオランダのハーグにおいて20人の平和事業家としてパネル展示された。

これらに関連したイベントに参加すると共に、哲学者スピノザ記念館訪問、画家フェルメールの作品鑑賞、韓国人李ジュン博物館訪問、オランダ人捕虜のNGO研究者との協議に加え、韓国では国会議員会館訪問、日本軍「慰安婦」問題日韓弁護士団会議参加、水国際展覧会参加を通じて、現場を感じ、現物を観て、現実を直視することで、今後の自分自身を見つめた旅の想いを記すとともに、日本軍「慰安婦」問題を入り口として恒久平和の構築について記すものである。

1. 日程

（日本軍「従軍慰安婦」問題被害者 李ヨンスさん来県）

- 8月23日 : 李ヨンスさん外 弁護士7名来県（鳥取県、島根県）、琴浦町「韓国式庭園風の丘」、湯梨浜町「中国庭園燕趙園」訪問
- 8月24日 : 竹島資料館訪問、小松電機産業株式会社でのシンポジウム
- 8月24日 : 足立美術館鑑賞、関係者帰国

（韓国、オランダ・ハーグ訪問）

- 8月30日 : 日本出国、韓国ソウルで日本弁護士連合会・韓国弁護士協会の日本による植民地支配、日本軍「慰安婦」問題等の早期解決を図る協議会に出席。
- 9月1日～6日 : オランダハーグ平和宮での式典・晚餐会に出席。各種会議参加と歴史記念館訪問。

9月6日～8日 : ベルギー視察
9月8日～10日 : 韓国大田にて国際水協会博覧会参観
9月10日 : 日本帰国

2. 日本軍「慰安婦」問題の被害者 李ヨンスさん来県

◆来県の経緯

冒頭に述べたとおり、島根県議会が『日本軍「慰安婦」問題への誠実な対応を求める請願』を採択した。これを受け、日本軍「慰安婦」問題の被害者 李ヨンスさん、弁護士崔鳳泰さん外 5 名の地方弁護士会平和使節団は、請願を発意された新日本婦人の会と、意見書採択を議決した島根県議会に感謝の意を表明し、これを契機として慰安婦問題を平和的に解決し、日韓の望ましい友好関係の構築を増進する目的で島根県訪問を希望した。

しかし、この決議に真っ向から反対する街宣行動、手紙・メール・電話による中傷誹謗が殺到し、議長からは「特定の個人、団体と面会することは、議会を混乱させる」との理由で面会が出来なくなった。

こうした中、HNS（人間自然科学研究所）は、議員及び「新日本婦人の会島根県本部」の皆様との懇談は難しいが、「戦後責任」を果たす立場にある日韓両国の良識ある国民が先頭に立ち、慰安婦問題を入り口に、世界平和の潮流を生み出す契機とするという趣旨で「未来を考える女性の会」をメンバーに交え、皆様の話をうかがい、世界的視野で未来への道筋を描く機会を設定するとの趣旨に賛同いただけるのなら、ご来県を歓迎するとした提案をし、これを承諾され来県の運びとなった。

◆ 空港ロビー到着

空港ロビーに到着された李ヨンスさんをはじめとする平和使節団の皆様を小松理事長の一行が出迎えた。空港では不測の事態を警戒し、足早にバスに乗り込んだ。日本の右翼団体と見られる人たちが「竹島を不法占拠している韓国と国交断絶」との垂れ幕を持ち上げ、奇襲デモを行なった。空港には、制服・私服の警察官 10 数名が配備されていた。

バスの中では、小松理事長の「20 年間の平和活動の中で、今回のシンポジウムは日韓両国の平和はもちろん、人類平和の新しい始まりを知らせるきっかけとなるように」との挨拶に続き、日本関係者から「東日本大地震に対する韓国知人からの手紙で慰められた」「李ヨンスさんにお会いできてうれしい。」「凜とされお若い（実は 86 歳）。」と和やかな雰囲気の中、一行は鳥取県に向かった。

◆ 鳥取県訪問

鳥取県と江原道との姉妹都市提携を記念した「風の丘」。この公園は 1963 年に釜山港を出航した韓国の漁船が故障して漂流し、赤碕沖に漂着したところを救助して、無事に帰国させたという史



実をふまえ、この地に日韓の友好が永遠に続くことを願い、日韓友好交流公園「風の丘」として作られた。

公園内には韓国式に建てられたウホデと石塔、鐘楼、石風車などがある。残念なことだが、友好交流記念碑に「日本海・東海」の文字が併記されていたが、「東海」の漢字をき損した跡が鮮明に残っている。韓国の皆さんはどのように感じられただろうか。

昼食を終え、日本最大の中国庭園である燕趙園を訪れた。東郷池畔に湧く東郷温泉のほど近く、鳥取県と中国河北省の友好のシンボルとして建設された日本最大級の本格的な中国庭園で、歴代皇帝が造り親しんだ皇家園林方式の中国庭園をそのままに再現している。設計から資材の調達、加工まですべて中国で行われ、建物は一度仮組したものを解体した上で日本に運び、中国人技術者の下、再度建設し、~~日本根にはそれが皇帝しか使~~用できない黄色の瑠璃瓦を使用し、建物には中国人彩画師により描かれた、皇帝を象徴する五本爪の龍をはじめとした2000以上の彩画が施されている。展示館庭には小松理事長が儒学を通じて平和思想を伝播するという意思で寄贈した、孔子と孟子、孫子の銅像が並んでいる。

庭園入り口では、弊社エナテクス女性・男性社員8名が一行を出迎えた。李ヨンスさんと固く手を握る女性社員の目に涙が溢れていた。

◆ シンポジウム

小松電機産業社の太陽ホールに、約200名の聴衆が集まった中「出雲から陽が昇る」のテーマで韓国平和使節団メンバーの特別講演が開かれた。日本軍「慰安婦」被害者 李ヨンスさんの「15歳の時、ある日の夜中に、引き連れられ、台湾にあった神風部隊に行きました。」「現在も歴史の生き証人である、私、李ヨンスが生きています。」「今年、86歳です。他のおばあちゃんも高齢で、健康状態が良くないです。」と、叫ぶように訴える李ヨンスさんの手は震えていた。最後の言葉として「私の念願は、この問題を平和的に解決してほしい。協力し合い、未来へ向けて一緒に進むべきです。」と被害者が生きている間にと強く念願され、締めくくられた。また、韓国平和使節団からは「朝を迎える前が一番暗い、平和の朝を迎える小松理事長の今回のシンポジウム開催に向けた努力は、歴史に残るものと確信する」とお礼の言葉が



【李ヨンスさんの話に涙する来場者】

述べられた。

島根県議会の意見書採択に大きな力を使っていた議長に、感謝の言葉を伝えたいとして来県された使節団の想いを聴くことから始めれば、必ず道は開ける。平和を求める共感のステージで対立



【シンポジウムを終え、李ヨンスさんを囲んで和やかな時間を共有】

から統合・発展へプロセスがここにある。決議文を採択した島根県議会、シンポジウム開催を支援した“輝く未来を考える会”、「和の文化」を生み出すプロジェクト構想を発表し活動する人間自然科学研究所はもとより、日本・韓国の良識ある人々の世界平和の潮流を生み出す大きなうねり・新たなステージが始まった。

◆ 人間としての交流

シンポジウム当日に訪れた竹島資料館前では、「慰安婦は捏造だ」「かえれ竹島」などと書かれたプラカードをもって幸福実現党の会員約20名がデモを行っていた。彼らに話しかけると、穏やかな表情で答えてくれた。

李ヨンスさんが“輝く未来を考える会”の会員さんと手を握る場面をよく目にした。後で聞いた話だが「慰安婦の証言をする日になると怖くて眠れない・・・信頼できる人と手を握ることで落ち着ける・・・」とのことだ。

【慰安婦は捏造だのプラカードを持って抗議】

いつまで「反省とおわび」をすれば済むのかと反発する多くの日本人がいる。加害者と被害者の認識が一致することはない。私の好きな歌手さだまさしの「償い」に、交通事故を起こした加害者が給料日には欠かさず、お詫びのメッセージと共に



【竹島資料館では李ヨンスさんの手が震えていた】

お金を同封し続け、10数年経ってようやく被害者家族から「送金しないでください。あなたの気持ちはわかりました。もうあなたの人生を歩んで下さい。」との手紙を受け取り、「救われた」と涙する歌がある。

歴代総理の「お詫びの言葉」は言葉に過ぎない。言葉で十分な反省があっても、相手の側に立ち、誠実な行動が伴わなければ、心には響かない。この問題も、過去の事実をしっかりと伝える歴史教育が必要であり、加害側と被害側の出来事や記録・データを保存展示し、過去を直視し、未来志向で、市民感覚で、グローバル社会での和の文化を創造することが大事である。

◆ 恒久平和への提言

『自分たちは戦争を知らない時代に生まれたから』と自分では考えていた。日常生活の平凡な幸せを楽しむ生き方より、地獄のような戦場で死ぬことを望む人はいない。ところが、人類は大量破壊兵器である核を使用してはいけないといいながら、広島・長崎で「当時の投下は終戦を早めるための手段だった」として人類に対して初めて核を使用した。そして正当化されている。「民族・愛国・家族のために」などの美辞麗句で純真な国民を戦争に駆り立て、殺戮だけが繰り返される戦場で兵士や軍隊の戦意低下を防ぐ手段として使われた性奴隷と言われる「慰安婦」制度。

国家や民族を口実に「愛国」の美名を使っても「性をあてがう」という異常な戦争犯罪は、旧日本軍の侵略戦争の美化、原爆投下の正当化論理と同じものである。



【韓国日本大使館前に設置された少女像】

日本大使館前の少女の像は、この像をどのように認識するのかで意見が分かれる。「半日のシンボル」か？「平和のシンボル」か？。「たくさん出来れば日本政府も困るが、平和の象徴と考えれば別の評価も出来る」との意見もある。

韓国平和使節団の崔ボンテ弁護士は「半日ではなく、反戦争、反帝国主義、平和と人権のシンボル。不幸を招く戦争暴力を二度と許さない。生き残っておられる犠牲者が少しでも楽に生活でき人

間としての尊厳が確立されるよう、また亡くなられた方々への追悼の記憶を大切に、戦争反対の意思を教育をとおして次世代の受け継ぎ、戦争のない歴史を繋ぐ使命がある。」と滞在申述べらていた。

今年 8 月、アメリカの韓国系アメリカ人の NPO が中心になって、少なくとも 20 箇所の従軍慰安婦像を設置しようとの動きがあり、カリフォルニア州のグレンデール市に最初の像の除幕式が行なわれた。韓国系と日系アメリカ人との間で新たな問題が芽生えている。ところが、この少女像を設置した市長であるデヴィ・ウィーヴァー氏が日本メディア「チャンネル桜」の取材に応じ、慰安婦像設置に反対していることを明かした。韓国メディアは「市長が少女像に反感」などと報じ、波紋を広げている。少女像については「見たこともない」とし、除幕式にも出席しなかったことを明かし、「グレンデールには韓国人が 1 万 2000 人も暮らしているが日本人は少ない」とし、「誰が勢力を持つかわかりですね」と述べ、韓国系住民の圧力があつたことを示唆した。

怨念の連鎖を人間の叡智と勇気で終わらせなくてはならない。今回の韓国平和使節団の来県・シンポジウム開催で、日韓関係者の多くの皆様と、語らい、聴き、泣き、笑い、見つめ、手を握り、共に食事し、飲み乾し、信頼という新たな関係が芽生えた。

小松理事長は、核保有国の結節点にある日本海・竹島＝東海・独島に「人間の尊厳」こそが基本的規範となる社会のシンボルとして女性像を建立し、その周囲へ、韓国日本大使館前の少女像を含め、世界に作られている関連する碑及び像の移設を通じて「平和の聖地」誕生を目指している。新しい共感のステージで「和の文化」を創造するため、従軍慰安婦の少女像を含め平和への動きが活発化している。

3. 韓国、オランダ・ハーグ訪問

◆ 韓国国会会館訪問

崔鳳泰弁護士（東京大学留学、三菱重工・新日本製鉄を相手取り釜山裁判所で損害賠償で勝訴、大邱地方弁護士会に所属し大韓弁護士協会日帝被害者特別委員長）の紹介で、金ミンキ国会議員と面会。その後、韓国日本弁護士団との日本軍「慰安婦」問題に関するシンポジウムに参



【韓国国会議事堂広場】

加。崔弁護士の紹介で面会した金ミンギ国会議員は義理の弟で2期目である。2度町長選に落選した私に、当選する秘訣を教えてくださいとユーモアを交えてレクチャーいただいた。

◆ 韓国日本慰安婦弁護士団会議出席

国会議員会館内にある会議室で開催されたシンポジウムは、2年前の日韓弁護士会共同宣言後の具体的な行動がないことを中心に議論され、最後に一般参加者の意見も交えて終了となった。日本弁護士側は大局からの問題解決、韓国は被害者の立場に立っての解決といったすれ違いがあるようだ。

韓国最高裁(大法院)の2011年8月30日の、「元慰安婦らの個人請求権放棄は違憲である」との判決、及び、2012年5月24日の「個人の請求権は消滅していない。日本企業は、戦時中の徴用工に損害賠償をすべきだ」との判に対する日本側の見解は、「日本の植民地支配、朝鮮人の強制労働、従軍慰安婦に対する国及び個人の請求権を、すべて、完全に消滅させる代償として、日本は韓国に対して、総額8億ドル以上の賠償金を支

元慰安婦の方々への内閣総理大臣のおわびの手紙

このたび、政府と国民が協力して進めている「女性のためのアジア平和国民基金」を通じ、元従軍慰安婦の方々への、わが国の国民的な償いが行われるに際し、私の気持ちを表明させていただきます。

いわゆる従軍慰安婦問題は当時の軍の関与の下に多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけた問題でございました。

私は、日本国の内閣総理大臣として改めて、いわゆる従軍慰安婦として、数多の苦痛を経験され、心身にわたり癒しがたい傷を負われたすべての方々に対し、心からおわびと反省の気持ちを申し上げます。

我々は、過去の重みからも、未来への責任からも、逃げるわけにはまいりません。

わが国としては、道義的な責任を痛感しつつ、おわびと反省の気持ちを踏まえ、過去の歴史を直視し、正しくこれを後世に伝えるとともに、いわれなき暴力など女性の名誉と尊厳に関わる諸問題にも積極的に取り組んでいかなければならないと考えております。

末筆ながら、皆様方のこれからの人生が安らかなものとなりますよう、心からお祈りしております。敬具

1996年(平成8年)
日本国内閣総理大臣 橋本龍太郎
(歴代署名: 小渕恵三、森喜朗、小泉純一郎)

【日本歴代総理の韓国慰安婦に対するお詫びの手紙】



【日韓弁護士会慰安婦問題シンポジウム】

払い、かつ、ほとんどあらゆる製造業の分野で技術援助をする」ことを明確にした日韓請求権・経済協力協定(1965年6月22日調印)第2条1の「両締約国は、両締約国、及び、その国民(法人を含む)の財産、権利、及び、利益、並びに、両締約国、及び、その国民の間の請求権に関する問題が、1951年9月8日に、サン・フランシスコ市で署名された日本国との平和条約第4条(a)に規定されたものを含めて、完全、かつ、最終的に解決されたこととなることを確認する」であり、韓国の判決とは意をことにしている。名乗り出た生存する元慰安婦は高齢で早急な現実的課題解決が望まれるが、平行して未来志向で、両国間の課題を活かした行動が不可欠である。

◆オランダハーグ視察

エナテクスが勤める 3 事業の一つである遠隔監視事業「やくも水神」の小松電機産業社長、人間自然科学研究所理事長小松昭夫氏は 20 年間の平和活動が評価され、1913 年、アンドリュー・カーネギーの資金によ



【オランダ・デルフトの旧市街地】

って建設された平和宮（オランダ・ハーグ、同宮殿には国際司法裁判所をはじめとする司法機関が

多数ある）の 100 周年記念事業の一環として企画された ①ベルタ・フォン・ズットナー（女性初のノーベル平和賞受賞）の活動紹介 ②過去 100 年間で世界平和に貢献した 20 人の実業家のパネル展示 ③ベルタ・フォン・ズットナー胸像の除幕式 ④平和宮での晩餐会の内、オランダハーグにある平和宮（世界の実業家カーネギーの寄贈により建

設、女性最初のノーベル平和賞を受賞したズットナー女史の胸像等があり、国際司法裁判所もこの地にある）の 100 周年記念事業の中の、世界の平和事業家 20 人の一人に選任され、その功績がパネル展示されることとなった。それを記念しての式典、晩餐会に出席するためオランダに行くこととなった。到着して目にしたオランダ市街は、歴史と文化・伝統が全ての町並みに現れていた。



【オランダ・デルフト広場、正面が市庁舎】

◆ 画家フェルメール「真珠の少女」記念館訪問

17 世紀オランダ絵画黄金期において最も傑出した画家のひとりで、調和のとれた明瞭な色調や簡素でありながら綿密に計算された均整な空間構成、光の反射やハイライト部分などを点描が特長。「真珠の耳飾の少女」色使い、光を取り入れた画、真珠に映った

襟の光、絵の中に色んな意味が込められている作品である。その他、婦人の買春を同意した笑顔。もらったお金等々。社会を風刺、考え方を絵にした作品を多数鑑賞した。



【フェルメール記念館】

◆ 哲学者スピノザ記念館訪問



スピノザ記念館、バールーフ・デ・スピノザ（1632 年～1677 年）はオランダ哲学者、神学者でデカルト、ライブニッツと並ぶ合理主義哲学者として知られ、ドイツ観念論やフランス現

代思想に大きな影響を与えたとされている。その住まいを見学。

「それでもリンゴの樹を植える」は



彼の有名な言葉だが、「未来が読めなくても、未来のために今やるべきことをやる」とのことだ。時代が要求する責任を果たす使命感は、何時の時代も重要である。

【哲学者スピノザ記念館にて】

◆ 平和宮 100 周年記念イベント



【平和宮（ピース・パレス）】

国連の国際司法裁判所本部があるハーグには「平和宮（ピース・パレス）」がある。これは世界平和、国際司法、戦争廃絶に貢献した重要な建物で、アンドリュー・カーネギーの寄贈した建物である。

平和宮の主な平和事業は①カーネギーのように著名な人物はもとより無名の平和慈善家を称える ②ピースメーカーの業績を称え世に知らしめるノーベル平和賞等の創設 ③記念碑・記念

物等の建立を通

じて平和を顕彰することである。今回のイベントでは、こうした平和慈善事業の分野から選定された、過去 100 年間での世界平和に貢献した 20 人の実業家のパネル展示に加え ベルタ・フォン・ズットナーの活動紹介、胸像の除幕式、平和宮での晩餐会が企画され挙行政た。



【正装して平和宮内で撮影】

◆ 世界の平和実業家 20 人のパネル展示等

展示会はアンドリュー・カーネギーと彼の平和慈善哲学を紹介したパネル、カーネギー平和殿堂やノーベル平和賞の事業展開に加え、20 人の平和実業家の活動内容と人物写真のパネル展示である。ヘンリー・フォード（フォード自動車会社創設者）、アルフレッド・ノーベル（ダイナマイト発明者）、ジョーン・D.ロックフェラー（スタンダード石油会社の創立者）、デット・タナー（米国メディア界の大物）、ジョーン・ロック（マグドナルドの創設者）、ビル・ゲイツ&メリナ・ゲイツ（マイクロソフト社会長）、小松昭夫（人間自然科学研究所理事長）等々の実業家のパネル 20 枚である。我々参加者は、展示会前日に会場を訪れ、ビル・ゲイツのパネルを前に記念撮影。当日のオープニングセレモニー後では、各国の代表と小松社長が記念撮影した。



【小松昭夫氏のパネルの前に】



【ビル&ミランダ・ゲイツのパネルの前に】

◆ 女性初のノーベル平和賞を受賞したズットナー女史の胸像除幕式参加

ハーグ市役所ホールで記念展示会の開会式がおこなわれた。約 300 人が参加してオープンパーティ形式で開催された。会場は関係者であふれた。ズットナー女史の胸像は平和宮に 1 体在るが、新しく若い頃の女史の胸像が 100 周年を記念して製作された。1901 年にノーベル平和賞が設立され、ズットナー、マザーテレサ、アウンサンスーチー等 12 人に続き、2011 年には「平和構築と女性」に焦点が当てられ、3 人のアフリカ女性が受賞している。



【新設されたズットナー女史の胸像】



【平和活動家ズットナー女史の胸像除幕式は 300 人が参列】

◆ 彫刻家イングリッド・ロレマ女史のホームパーティ



【彫刻家ロレマ女史（左から 2 番目）】

除幕式終了後、ズットナー胸像彫刻家イ



【彫刻家イングリッド・ロレマ女史のホームパーティー】

ングリッド・ロレマさんのホームパーティーに招待された。参加していたロレマさんを支援している芸術品コレクターが言った言葉が印象的だった。「ドイツとオランダの戦争犠牲者にとって、今では、第 2 次世界大戦の出来事は、許すことはできても忘れることはできない。しかし芸術を通して、両国民が同じ作品を作り共有することで平和の輪が広がっていくことができる。」とオランダ・ドイツの女性、子供を象徴し、年齢に応じた高さで人間像をイメージした柱をアレンジした彫刻群の写真を見せ、自らの考え方を紹介してくれた。

◆ オランダ国会会館での晩餐会



【国会会館前で正装し記念撮影】



【隣席のインド人 マダン氏】
利が約 10 点。オークション形式で始められた。

優れものはアフリカの子供の教育資金提供で 70 万ユーロの値段がついた。臨席のインド人、ドクターマダン氏と話が弾み写真を撮る。メールで写真を送り、彼が日本に来た際には案内すると約束した。

全員が正装し 1800 年代に建築され、現在も国会関係機関として利用されている宮殿での晩餐会に出席した。まずは晩餐会開催まで立食でのパーティー。生演奏が流れる中、会話が弾む。



【晩餐会前のパーティ会場】

約 2 時間後、国会会館「騎士会館」での晩餐会が始まる。会場は国王、王女の指定席がある歴史ある大ホール。およそ 300 人はいるだろうか。晩餐会の料理は 1899 年の第 1 回ハーグ平和会議で提供された料理とほぼ同じメニューになっている。晩餐会のテーマは「平和」である。

「ハーグ平和宣言」の会長コーラ・ワイス氏、国連連合基金のジリアン・ソレンセン氏、アンドリュー・カーネギーのひ孫ウイリアム・トムソン氏がスピーチ。8 時から始まり 12 時まで続く。スピーチあり、ダンスあり、演奏あり、そしてドネーション。

「子供の戦争犠牲者を支援する会」及び「戦争と平和通信研究所」の支援のためのドネーションである。1 点 10 万円以上

上の権



トラベルの語源はトラブル、いろんな問題が起きて物事が生まれると言われている。規制がない中で議論し、議論の終わりに何かが見えてくる。

晩餐会も 12 時には終わらない、会場を移して朝まで議論するらしい。立食パーティー、晩餐会后、2 次会、3 次会と場所を移し

【国会騎士会館で開催された晩餐会】

て交流する時間の中で、新しい自由、議論、出会いができる。それぞれの人生の目的を具現化するために、時間とコミュニケーションを楽しむ文化がここにはある。

◆美術博物館等観光

ホテルの横に位置するミュージアムを訪問、1886 年の風景を 360 度のパノラマとして表現。絵の上と下が見えないように距離をとり、本物の砂、漂流物で絵を合体することで実像のように表現した輪になったキャンパス。120m の長さ、35m の円周。200 年前のベンハーグの街並みを画家シンチェさんが絵を描いている。実物と虚像を人間は区別できるのか考えさせられる。



【360 度のパノラマが描かれている展望台風景】



【平和宮を持ち上げる巨人？】

ミニチュア博物館も訪問、オランダの建物を 25 分の 1 のミニチュアに圧縮した作品群が並ぶ。平和宮、ノートルダム寺院、アムステルダム駅は東京駅のモデルとして知られている。オランダ、ベルギーで鑑賞した作品全てに個性があり、発想が豊かで、想定外の表現力にため息が出る毎日であった。

◆ 韓国人李ジュン博物館訪問



【記念館玄関風景】

李ジュン博物館を見学。朝鮮併合の会議がハーグで開催されるに当り、最後の朝鮮高宗国王が、国際平和会議で第2次日韓協約の無効を世界に知らせ、

韓国の国権を回復させる

嘆願書を届ける命令を出し、李ジュン外2人の使者がハーグを訪れたが、朝鮮の意に反し日本による朝鮮併合が行なわれた。李ジュン記念館の展示は、李ミョンバク大統領の書、小松氏が協力し作成された「獨立」のレプリカ、1907年第2回平和会議で併合の不当性を訴えるハーグ会議への親書、韓国国民が反対したことの記事、籠の鳥が韓国国王で籠の外が伊藤博文を思わせる風刺画、等々である。世界平和の中心であるハーグで、自国の正義を伝えるエネルギーを館長の言葉から強烈に感じ取った。



【小松理事長の協力で作成された安重根の「獨立」レプリカ】



【館長を交えた INMP 関係者】

◆ オランダ人捕虜の NGO 研究者協議

日本占領によるオランダ人捕虜 NGO 研究者、ワグテン・ド・クサマ、グレン・フォール



【NPO 関係者との協議を終えて】

ダーさんとホテルの会議室で会談。小松氏作成のビデオが会議の前に上映された。「アジアが中心でヨーロッパについて触れられていない。以前、オランダで日本人権大使が戦争責任について話をしていた時に『ダメレ』との発言が

あったことを知っ

ているか？」といきなり質問された。「日本大使に戦争責任、賠償について書簡を送ったが、日本側が拒否したことの事実を知って欲しい」と話された。また「アジア女性基金は民間が主導で、政府がやったのではないと聞いている」との質問に小松氏は「そうではない。政府が資金を出し、財団が運営している。税金である。」と説明。「オランダがスマトラを植民地化し、当時 30 万人のオランダ人が住んでいたが、日本軍に 4 万人が捕虜になり、12 万人が現地に残ったが、その他はどうなったかわからない。」彼の父はスマトラで殺され、弟も死んだ経験を持つ。また彼女は捕虜の 2 世で、同じ間違いを起こさないように NGO 活動をしているとのこと。



【日本に対する厳しい意見出された】

厳しい意見のやり取りであったが、小松氏はこれらの問題は、戦前・戦中・戦後責任に分割し物事を捉えなければならないとの視点から、これまでの氏の活動を紹介し、社会問題から平和になるためのインフラとして水道・下水事業を興した。今後さらに平和のインフラとしての平和の事業化の旗を立て推進することを述べられた。

◆ 平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）本部訪問

世界に存在する平和のための博物館の国際ネットワーク(INMP)の未来像を考える組織である。組織の活動を通じて、INMP 平和基金の創設、平和博物館新設、国連広報部との連携、平和教育という観点からの学校教科書の見直し等々の推進を図っている。2011 年 8 月 10-28 日には、ベルタ・フォン・ズットナー特別展が成功裡に開催された。これは世界平和のための京都博物館が、オーストリア大使館及びピーター・ファン・デン・ツンゲン博士により「ウィーンにおけるベルタ・フォン・ズットナー平和博物館創設に向けて」という講演もいただいた。

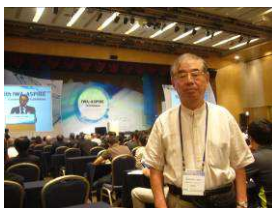
この度の企画は INMP による直接プロジェクトではなかったが、INMP が今まで育ててきた平和博物館ネットワークの果実の一つであり、これをきっかけとして、ハーグにある平和宮創立 100 周年を記念するための実行委員会との協力によって「慈善と平和：その過去と現在」という巡回展示会がこの度企画された。この企画に対し、INMP 理事長ピーター博士より、小松氏の協力と支援に対し感謝の言葉が送られた。



【INMP 本部前にて撮影】

◆ 第 5 回国際水協会世界会議博覧会参加

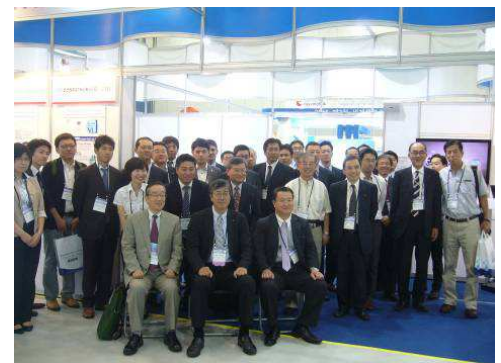
韓国大田で開催された東アジアの国際水協会の会議と博覧会に参加した。会議入場料が 2 万円/人とかかなり高額で、内容を期待したが、会議が中心で展示には魅力ある製品は無かった。日本企業では「水イング」「東京都企業局」等が出展していた。アジアの状況は、インフラ整備が中心で、管理・監視までの状況に至っていないが、世界的に水質悪化と水不足が懸念される「平和の源・水」の世紀を、先端技術「やくも水神」が役割を果たすことを期待する。



【シンポジウム会場】



【展示会場】



【水イング社長と共に記念撮影】

4. 考察

今回のヨーロッパ訪問のきっかけは、次の事情によるところが大きい。

島根県議会の日本軍「慰安婦」問題に対する安倍内閣への意見書が採択されたことに對し、元従軍慰安婦の李ヨンスさんをはじめ大邱地方弁護士団 7 名が島根県訪問をし、感謝の意を表明し、これを契機に懸案である慰安婦問題を平和的に解決し、日韓の望ましい友好関係を増進することを目的とする旨を打診されたが、諸般の事情からかなわなかった。

それを受け、人間自然科学研究所では「戦後責任」を果たす立場にある日韓両国の良識ある国民が先頭に立ち、慰安婦問題を入り口に、日本・朝鮮半島の非核化、世界の核削減につなげ、日本・韓国・朝鮮から世界平和の潮流を生み出すと言った趣旨で、訪問団の話のうかがい、世界的視野で未来への道筋を共に描く機会とする趣旨に同意されるならば訪問を受けいれるとして、鳥取・島根県視察とシンポジウム開催を実施された。

小松電機産業を退職し、鳥取県で現職について 4 年が経過した。その間、小松電機産業の「水神」代理店として県内はもとより、兵庫・岡山県北へも事業を展開した。さらに新しく情報伝達事業、遠隔監視事業、太陽光発電事業に主要な業務を展開したことで 10 億円の業績を上げることが出来た。個人的にも「めだか論語塾」のスタッフとして、保育所、小学校、老人施設等で論語を共に学び、生きる事の意味を求めてきた。孔子は「30 歳で立ち、40 歳で惑わず、50 歳で天命を知り、60 歳で耳に従い、70 歳では範を超えず」とあるが、自分の今後 20 年をどのような生き様にするのか、まさに「分水嶺」に立たっている。

そんな時期での元慰安婦李ヨンスさんとの出会いである。彼女の過去はシンポジウムで涙ながらに話され多くの共感を得たが、自分としては彼女が 68 歳で大学に進学し国際問題を専門とする大学院まで卒業したことに驚かされた。人生は、目を閉じる最後の瞬間に自分自身を振り返り「良い人生だったのか、そうでなかったのか気づく」と言われている。自信あふれるヨンスさんの発言、勇気、行動力に圧倒された。



【同行した韓国嶺南日報の新聞報道・日本でのシンポジウム、竹島資料館訪問等、】

韓国弁護士訪問団に同行しているとき、小松社長から海外視察の情報を頂いた。韓国での日本軍「慰安婦」問題等の日韓弁護士会議参加、国際水協会世界会議参加、オランダハーグの平和宮における小松氏の平和活動が評価されてのパネル展示、晩餐会招待、世界の平和活動家とのミーティング等々、密度の高い 12 日間の世界視察旅行である。自分への投

資と早速、小松社長にお願いし参加を申し出ると、快く同意いただき参加した。

日韓に存在する深い溝、参加した日韓弁護士会議でも見て取れるが、現存の問題の解決か？、未来志向での関係づくりか？目的と目標に大きな隔たりを感じた。また、初めての訪問となったオランダ・ベルギーでは小松社長の20年間のHNSの活動が評価され、世界の平和の中心であるオランダハーグの平和宮（ピースパレス）主催の市庁舎ホールでのパネル展示、女性初のノーベル平和賞ズットナー女史の胸像除幕式、正装での騎士会館での晩餐会参事は圧巻であった。HNSが発刊する「朝鮮半島と日本列島の使命」に記された内容を改めて感じる毎日であった。

女性の視点を、政治や社会の意思決定に反映させて政策を実施することを求める動きに、世界が連帯している。2011年のノーベル平和賞が、女性と平和のために非暴力で力を尽くした3人に授与されたことは、すべての女性に対して、平和構築や国づくり、より良い社会を作ることに女性も主体的に関わる時代がやってきたというメッセージとして受け止めるべきなのではないか。だとするならば、慰安婦問題に限らず、あらゆる差別・暴力・人権に関して、積極的に「和の文化」を生み出す役割をいま果たすべきだと確信する。

元慰安婦の李ヨンスさん証言、弁護団の行動、李ヨンスをまじえてのシンポジウムから端を発し、オランダでのオランダ人捕虜NGO研究者との協議、オランダ平和宮での晩餐会、哲学者スピノザ記念館訪問と、全ての出来事がこれまでの確認と、新たな出会い、気づきの出来事であった。出会った人、団体、組織、観光した建物、地域、風景、鑑賞した音楽、芸術、思想、哲学、歴史が強烈な印象で残っている。我々を取り巻く『対立』から抜け出し、新たな共感のステージで、共に平和を構築するには人間の『智慧』が必要である。古典、歴史から学ぶしかない。

濃厚なスケジュールの移動中、食事を道中の郊外レストランで取り、庶民が集うバーやカフェでビールを飲み、小松理事長をはじめ参加者全員と非日常な時間と空間を共有できたことで、これからの人生を「考え、仮説を立て、確認し、実証し、何かをつかむ60歳」のスタートを切ろうと決意した。

以上